

# 福岡工業大学 学術機関リポジトリ

## 教養教育における主体性育成のための教育実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福岡工業大学教育開発推進機構 公開日: 2024-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): Autonomous learning, Faculty development, Liberal Arts 作成者: 徳永 光展, 坂本 文子, 宗正 佳啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11478/0002000107">http://hdl.handle.net/11478/0002000107</a>

# 教養教育における主体性育成のための教育実践

徳 永 光 展 (教養力育成センター)

坂 本 文 子 (教養力育成センター)

宗 正 佳 啓 (教養力育成センター)

## Teaching Practices for Nurturing Learners' Autonomous Learning Attitudes

Mitsuhiro Tokunaga (Center for Liberal Arts)

Fumiko Sakamoto (Center for Liberal Arts)

Yoshihiro Munemasa (Center for Liberal Arts)

### Abstract

Under the university-wide Faculty Development policies for 2023, our university's Center for Liberal Arts conducted original workshops three times during the 2023-24 academic year. Three teachers gave presentations about what they did in the classroom to nurture learners' autonomous learning attitudes. The topics covered how to raise learners' motivation, practical ways to set up assignments, and how to increase students' ownership in learning. In each workshop, participants exchanged opinions on what teachers can or should do to facilitate learners' autonomy, and this provided the participants with new insights toward teaching.

**Key words:** *Autonomous learning, Faculty development, Liberal Arts.*

### 1. 2023年度FD推進機構教養力育成センター部の重点事項

教養力育成センターは、学生の主体性を育成すべく、アクティブ・ラーニング型の授業を積極的に導入してきた。センターが自立した組織として活動を開始した当初より、一貫して「学生の主体性・自律的学習促進に資する研修会の実施」を掲げてきたが、本稿は2023年度に実施された研修内容について報告するものである。目下、第9次マスタープラン(2022-2024年)に基づき、如何にして2040年の社会を見据えた実践型人材に資する教養教育を構築していくべきかという課題と向き合っているが、教員の指導力を時代の要請に応じて補充・進化・発展させていく必要性については、強調するまでもなく明らかである。そこで、研修における話題提供者に問題点のまとめと研修内容の振り返りをしてもらうこととした。

### 2. 研修会の概要

今年度は第1回(9/13)を徳永、第2回(11/15)を坂本、第3回(1/17)を宗正の3名が担当し、話題提供を行った。教育開発推進室にも参加してもらった。研修会では、まず発表者が主体性の育成に繋がる授業内の取組についてプレゼンテーションを行い、その後、意見交換の時間を設けた。以下、各回の担当者による実践内容である。

### 3. 「文学」における実践事例(徳永光展)

「文学」は2018年より2022年までのカリキュラムでは「日本文学」として開講されてきた内容を精選して、2023年度より開講しているものである。担当は徳永が前期に5クラス、後期に2クラスの計7クラスすべてを担当した。いずれも机・椅子が固定化した大教室での授業であったが、そこで如何にして学生に考えさせる習慣を醸成させ

るか、また、日頃は小説を読む習慣のない学生を多数含むクラスで学生に読むことの重要性や価値に気づかせるかに腐心した。受講生には文学を専攻する学生は皆無であるが、主体性育成に資する教養教育の機会をこの授業で与えるために、受講生のプロフィールを考えた上で、問題を投げかけることにした。

### 3.1 学生への問いかけ（専門では扱わないが、大学生として見つけてほしいこと）

作品を取り上げる際に、以下のような問いを発しながら、作家の人生について思いを馳せられるよう、適宜話し合いの場を持たせた。

- ① 今（学生時代）は修行中と仮定して、何歳で輝きたいですか。  
（甲子園の高校野球で目立つ選手とプロ野球で活躍する選手は同じではない。また、私たちは皆、いずれは要介護老人になる。）
- ② したいことはいつわかりますか。  
（物理ができたからとりあえず理系、数学が駄目だから文系と乱暴に決めなかったか。）
- ③ したいこと、したくないことは何ですか。  
（今、頭でイメージできなくても決して悪いわけではない。）
- ④ どこにいたいですか。  
（今はたまたま福岡だが……。外国も含めて、思いもよらぬ勤務地になることを受け入れられるか。）
- ⑤ 誰と出会いたいですか。  
（そこには別れも伴うということにも気づきたい。）
- ⑥ 10年前と10年後。  
（8歳時の回想〈遠い過去〉と28歳の自分〈想像できない未来、いずれも長い時間のようだが、あえてそれぐらい長い目で考えることも重要で、あせらない。〉）
- ⑦ 選択と挑戦の繰り返し。

### 3.2 授業の概要

授業では、夏目漱石、森鷗外、川端康成、村上春樹を取り上げ、その生涯について年譜に基づいて考察させる機会をまず持つことにした。夏目漱石が必ずしも専攻した英文学や就職で就いた英語教師という仕事に馴染めず、ロンドン留学では激しい挫折体験を経験したこと、その後気分転換を目的として始めた文筆が文豪・漱石を生んだことに触れた。

「私の個人主義」は学習院での講演記録であるが、進路を定められていない学生の悩みは当然であること、納得できるまで模索を続けるべきであることが述べられている点において、現代でも全く古さを感じさせない。

また、進歩の早い時代に生きる現代人の不安を漱石は日本の近代化が抱える根本的な問題として捉えているが、各作品の中で登場人物がどのような苦悩を吐露しているかを具体的に紹介してもみた。

森鷗外は医者・軍人・作家の役割を生涯担い続けた。ドイツ留学の手段を得るべく陸軍の軍医という職業を選択したこと、ドイツでの恋愛体験に根差した作品が「舞姫」に結実し、ヒットしたことで書き続ける人生へと発展していった状況について概説した。

「妄想」は人生の後半に差し掛かっていた鷗外がドイツ留学と帰国時の様子を「自分」に託して論じた作品であるが、「役」を演じ続けていることへの違和感が吐露されている。その様子は、勉強や課外活動、アルバイトなど幾つもの役割を担いながら学生生活を過ごしている学生たちの在り方にも直結することに言及した。

川端康成は、国際的な評価を早くに受けた日本人作家でノーベル文学賞受賞の影に多くの翻訳者の努力があったことを理解させた。幼くして孤児となったこと、学生時代から作家志望だったことに言及しながら、伊藤初代との失恋の痛手が長く彼の人生を彩り、作品にも彼女をモデルとしているらしい人物が幾度も登場することにも考察を進

めた。その上で、ノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私」と「伊豆の踊子」を取り上げた。

「伊豆の踊子」は康成が高等学校の頃より10年ほど毎年訪れていた伊豆での実体験を描写したものであるが、主人公が孤独を癒すようにして旅芸人に惹かれていった様子に着目させながら、ほぼ同世代を生きる受講生にどのように映るかを話し合わせた。

以上は既に他界している作家であるが、続いて存命作家で現在海外でも最もよく読まれている作家である村上春樹を取り上げた。学生時代は英米文学とジャズに熱中し、作家を目指すようになったのは20代が終わる頃だったこと、そこからはヒット作を次々に描き出し、翻訳も数多くの言語で行われている状況を概説した。

その後、具体的な作品として「四月のある晴れた朝に一〇〇パーセントの女の子に出会うことについて」と「蜂蜜パイ」、講演記録としてアンデルセン文学賞、カタルーニャ文学賞、エルサレム文学賞それぞれを受賞した際に現地で語った文章を読んだ。

### 3.3 異なる見え方の発見

併せて、学生に語ったのは、以下のような状況に気づかせることであった。

- ① 文学作品は、接する際の読者の状況により、異なった見え方をする。
- ② 高校までの国語の試験は、文脈から読み取れることだけを問題にする（それしか問わない）という暗黙の了解の上で作成されている。問題としては出てこない膨大な情報を読み取れる可能性に気づくように導く。
- ③ 作家論→作品論→読者論（こう読めるという可能性の追及）
- ④ 学年や学科を異にする学生集団を前にして、それぞれ独自の見え方、捉え方をすることを推奨。
- ⑤ 生きる上でどうしても越えていかなければならない課題への直視を促す。

### 3.4 学生に与えた課題

学生と教師の双方向性を担保する意味で FIT-AIM の授業の振り返り欄に毎週授業の感想を記録するよう指導すると共に、第6週（夏目漱石と森鷗外）、第12週目（川端康成と村上春樹）、第14週目（全体のまとめ）にレポート課題を課した。この中では、各受講生が授業で扱った作家作品に対して真摯に向き合い、遠い過去を生きた作家たちの残した文章が実は現代を生きる私たちにとっても重要な問題を提起していること、作品を執筆当時の作家が置かれていた状況に関する知識も併せて理解を深めていけば、深い読解に到達し得ることへの気づきも確実に得られている様子が伝わってくる内容が多く寄せられた。

## 4. 「地域創生論」、「地域創生 PBL」における実践事例の紹介（坂本文子）

2023年度より教養選択科目として開講された「地域創生論」および「地域創生 PBL」の概要と学生の変化について紹介する。

### 4.1 背景

対象となるこれらの科目は、いずれも自治体、企業、NPO等団体などと連携して、地域に根差した問題に目を向け、その問題に対して具体的な解決を図ることを通して学ぶ点で共通する。

その背景には、近年、人口減少と人口構造の急激な変化に加え度重なる自然災害など、地域社会が抱える課題多様化に加え、例えば廃校や空き家の利活用といった絶対的な解決を見出しにくい課題が増えていることが挙げられる。

本科目は、こうした社会的要請を視野に、学生の学びと社会貢献を図る教育法、サービス・ラーニング観点から設計された。

### 4.2 求められる技能と授業設計

絶対的な解決を見出しにくい課題が増えているなかでは、より多くのステークホルダーが納得できる回答（納得解）を導く技能が必要とな

っている。それには、①異なる価値観や考え方をもち他者に自己を投影し、相手が何を考え、どう感じているのかを想像するような「共感力 (Empathy)」, ②不確実性を孕む時代のなかで、対応できる客観的・俯瞰的な思考とその基礎となる専門性の修得を要する「批判的思考力 (Critical thinking)」, ③個人的利害を超えて社会連帯や公益における価値を考えられる「公共心 (Public-minded)」, ④対話を生み出し実社会とつなげる力や軌轢を乗り越えられる技能とマインドとしての「実践力」, ⑤折り合いをつけ、合意形成を促すことができるスキルと包摂性の涵養としての「対話力」などが必要となるだろう。

そのような力の獲得には、知識と同時に、異文化体験や単に批判に陥らない議論の経験、社会を変えられると思えるような“小さな”失敗と成功の体験といった取組過程とリフレクションによる学びへの展開が重要になるだろう。

こうした観点から、「地域創生論」は、社会背景や地域を読み・解くための知識と技法の獲得を中心に据えた内容とし、大学周辺にある公民館および地域交流センターなどと連携して、フィールドに出る体験をしてもらうこととした。前期 5 クラス、後期 1 クラスが開講され、履修者は前期 161 名、後期 55 名だった。

これに対し、「地域創生 PBL」は、篠栗町福祉課および「古賀式私の朝プロジェクト」(古賀市、西日本新聞社、株式会社明治、福岡県醤油醸造協同組合、福岡工業大学によるプロジェクト)と連携し、特定の地域におけるフィールドワークを中心に据えた。連携先となる地域パートナーが抱える課題を学生と共有してもらい、学生が具体的な解決策を地域パートナーや住民に向けて返すことをゴールとした。後期 2 クラスが開講され、履修者は全 32 名だった。

#### 4.3 学生の変化と今後の課題

履修学生の変化として、「地域創生論」では、コミュニティセンターでアルバイトを始める学生や、

「ラグビー教室を開いて地域の人と関わることをやってみたい」という学生、「体調が悪いバイト先の常連から花火大会の出店を手伝ってほしいと言われ、乗り気ではなかったが、自分が住んでいる地域がにぎわっているのは嬉しいことなので、挑戦してみようと思う」という学生もおり、自らが暮らす地域社会に目を向け関わろうとする姿勢がうかがえた。また、「地域創生 PBL」では、子ども食堂でのボランティアをになった学生が、そこで運営に携わる高齢者から「配偶者が亡くなった際に食欲がなかったが、ここ(子ども食堂)に来ると食べられるようになった」という話を聞いたことで、やりがいや人との交流が介護予防にもつながるという着想を得て、提案へとつなげていく様子もみられた。また、学生が近隣の公的施設と交流し、「学生も参加できるものはありますか?」といった質問を投げかけたことで、地域が求める若者の地域参画と実際の取組の間には隔たりにあることへの気づきを喚起していた。

他方で、学生が授業で得た知識と目の前の事実をすぐに結びつけて理解できない様子がみられたり、与えられたテーマやグループ活動に積極的に参加できない様子がみられたりすることもあった。今後、チームビルディングやリフレクションの内容をさらに充実させていく必要があるだろう。

### 5. 発見を基にした主体的学習(宗正佳啓)

#### 5.1 雑学的知識がもたらす発見とその効果

脳科学では、脳内ホルモンのドーパミンは脳内で重要な役割を果たす神経伝達物質であり、特に発見、学習、主体性に深く関与していると考えられている。このホルモンは、報酬系と呼ばれる脳のシステムで働き、新しい情報を学んだり、自ら行動を起こす動機を与えたりするのに大きな影響を与える。ドーパミンは「発見」のプロセスにおいて重要な働きを持ち、新しい情報や体験を得たときドーパミンが放出され、その結果、喜びや満足感を感じる。この報酬感覚があるため、さらに新しいものを探求し続けるようになる。

ドーパミンは「学習」においても欠かせない要素であり、学習過程では成功や進歩の瞬間にドーパミンが分泌され、それが学びの意欲を高める。これは、テストで高得点を取ったり、新しいスキルを習得したりするときを感じる達成感の背後にあるメカニズムである。このポジティブなフィードバックループにより、さらに努力を重ね、継続的に学習しようとする動機を得る。

ドーパミンは「主体性」の形成にも深く関与しており、自主的な行動の選択と実行において、重要なモチベーションの源となる。目標を設定し、それに向かって行動する際に感じる達成感や満足感は、ドーパミンによってもたらされる。このホルモンが十分に分泌されることで、目標達成に向けた行動を積極的に取るようになり、自らを主体的にコントロールできるようになる。総じて、ドーパミンは発見、学習、主体性という三つの重要なプロセスにおいて、不可欠な役割を果たしており、これが適切に機能することで、新しいことに挑戦し、学びを継続し、自らの意思で行動を起こすことに繋がっていく。

著者はこのドーパミンの働きに注目し、主体性のある学習を行うためには発見が重要であると考えている。そのため、著者が担当する英語の授業では、発見を促すために雑学的知識（トリビア）を適宜提供することを心掛けている。雑学的知識によって新しい事実や興味深い情報を発見するたびに、ドーパミンが放出され、さらなる学習意欲が駆り立てられる。このプロセスにより、学生は単なる情報の受け手から、自分で学び続ける主体的な学習者へと変わるきっかけを得ることが可能になる。以下に、その雑学的知識の幾つかを紹介していく。

## 5.2 英語の雑学的知識

英語が所属するゲルマン系言語の起源はヨーロッパやインドの言語の源であるインド・ヨーロッパ祖語と呼ばれるものである。この言語を話す民族は B.C. 3500 頃までは現在のウクライナあたり

に住んでいたが、それ以降ヨーロッパ各地、西アジア、インド方面に向けて移住を開始している。

August Schleicher (1821-1868) の *A Compendium of the Comparative Grammar of the Indo-European, Sanskrit, Greek and Latin Languages, Vol.1* 『インド・ヨーロッパ諸言語比較文法概要：インド・ヨーロッパ祖語の音韻論・形態論摘要』（1861）によると、インド・ヨーロッパ祖語は 1. Indo-Iranian, 2. Armenian, 3. Albanian, 4. Slavic, 5. Baltic, 6. Greek, 7. Italic, 8. Celtic, 9. Germanic, 10. Tocharian, 11. Hittite に派生しているということである。

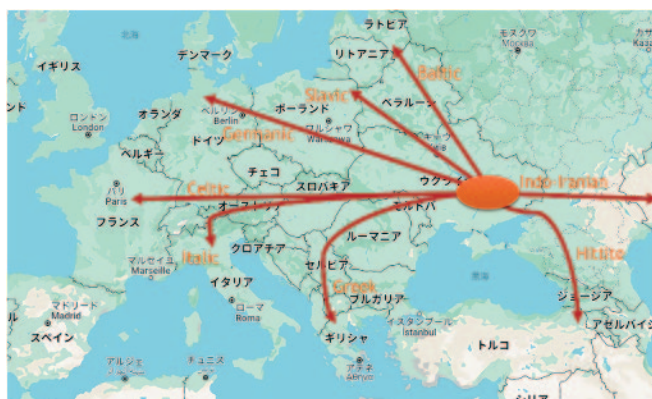


図 1 インド・ヨーロッパ祖語の派生

上図のように、英語が所属するゲルマン系言語は現在のデンマーク、ドイツ北部、オランダ北部に移住した民族の言語である。現在のフランスあたりに移住した民族はケルト系の民族であり、その中のブリトン人は今のブルターニュ地方に住みついている。このブルターニュはブリトンが変化したものである。その後、ブリトン人の一部が海を渡ってアイルランド、イギリスに移住していく。アイルランドに移住したブリトン人は、さらにスコットランドに移住していく。このことからイギリスの先住民はブリトン人ということになるが、今現在イギリスを Great Britain (グレートブリテン島) と呼ぶ場合があるのは、フランスのブリトン人がいたブルターニュ地方と区別し、イギリスを大きい方のブリトン、すなわち Great Britain と呼んだことの名残りである。身近な例としては、Great Britain の呼び方は、イギリス代表としてオ

リンピックに参加する時に使用されている。

### Chronicle

~A.D.43 Britons (Celts) イギリスの先住民はブリトン人  
London, Thames, Tees, Inverness, Carlisle, Kilpatrick, etc.

A.D.43 Romans ローマ帝国がイギリスを支配  
Lancaster, Manchester, Winchester, Worcester, Exeter, etc.  
caster → camp

A.D. 449 Invasion of Jutes, Saxon, and Angles  
Jutes: Kent  
Saxon: Essex, Wessex, Sussex  
Angles: East Anglia, Mercia, Northumbria  
アングロサクソンヘプターキーが形成される

図 2 年代記

前述のようにイギリスの先住民はブリトン人であるが、地名にその名残がある。ロンドン  
はブリトン人の言葉で勇敢な人という意味であり、テムズ川は暗い川を意味している。しかし、紀元43年頃からイギリスはローマ帝国の侵略を受け、その支配が5世紀の中頃まで続く。この支配の影響がLancaster, Manchester, Winchester, Worcester, Exeter等の地名に残っている。

5世紀の中頃から、イギリスは375年から始まったゲルマン民族大移動の余波で、今のデンマークやドイツ北部に住んでいたゲルマン系民族である、ジュート族(Jutes)、サクソン族(Saxon)、アングロ族(Angles)の侵入を受ける。



図 3 ゲルマン民族のイギリスへの移動

ジュート族は今のケント州へ、サクソン族はエ

セックス、ウエセックス、サセックスに、アングロ族は東アングリア、マーシア、ノーサンブリアへ移住している。Englandという名詞があるが、これはアングロ族がデンマークあたりにいた頃、釣り針の形をした土地に住んでいたことに由来し、angle(釣り針)land(土地)が変化してanglandになり、最終的に9世紀になってEnglandとなった。そして、これら3つの民族の言語が今の英語の源になっている。

その後、6世紀から7世紀にかけてキリスト教がイギリスに入ってくる。

### 6th~7th Christianity and loan of Latin ラテン語の借入

(例) butter, cup, street, wine, abbot, alter, ark, candle, temple, organ, nun, rule, etc.

### 8th Invasion of Danes 古ノルド語の借入

(例) by (dwelling) Denby, Ingleby, call, fellow, husband, law, wrong, knife, they, though, etc.

### A.D.1066 Norman Conquest フランス語(ノルマン・フレンチ)の借入

(政治) administration, crown, empire, government, state

(法律) court, crime, judge, justice, prison

(宗教) clergy, faith, preach, pray, religion, virtue

(料理) beef, pork, mutton, veal (vs. cow/ox, pig/swine, sheep), stew, fruit

(その他) prince, country, noble, royal, army, captain, letter, literature, question, male, sentence, etc. (約10,000語)

### 16th ルネッサンスの時代、ラテン語、ギリシア語からの借入

(例) atmosphere, drama, electric, museum, orchestra, theory

図 4 年代記 2

当時のキリスト教の教義はラテン語で記されていたため、キリスト教の伝播とともにラテン語との言語接触が行われる(第一次言語接触)。この接触によりラテン語から宗教に関する語彙が借入されることとなる。

8世紀に入ると、北欧のノルド語を話す民族のデーン人がイギリスに頻繁に侵入してくる。これによりノルド語との接触、借入が行われる。意外なのは、theyやthoughといった閉ざされたクラスの語彙が借入されて使用されていることであり、通常、閉ざされたクラスの語彙が本来語を差し置いて使用されることは稀である。

その後、1066年にイギリスという国そして英語という言葉に一大事件が起こる。当時のイギリスの国王はエドワード懺悔王であったが、エドワードに跡継ぎがいなかったため、その死後後継者争

いが勃発する。フランスのノルマンジー地方を治めエドワード懺悔王と親交があったギョーム 2 世が、王位継承を主張してイギリスに侵攻し、勝利してイギリスを征服してしまう。いわゆるノルマン・コンクエスト (Norman Conquest) である。これにより、フランス語 (正確にはノルマン・フレンチ (Norman French)) との言語接触が英語との間に生じる。この接触により政治、法律、宗教、料理、その他約 1 万語くらいのフランス語が借入されることとなる。

また、ノルマン・コンクエストは英語本来の数の数え方にも影響を与えている。古英語期 (1,100 年までの英語) は、英語と同じ西ゲルマン語に所属するドイツ語と数の数え方は同じであった。つまり二桁の数字は一の位から数えていた。

(1) 21

古英語 : an 7 twentig  
1 and 20

ドイツ語 : ein und zwanzig  
1 and 20

例えば、21 は一の位の 1 から数え、その後十の位の 20 を数えていた。しかし、ノルマン・コンクエスト以降、フランス語の影響でフランス語と同じく、twenty-one のように十の位から数えるようになっている。

16 世紀に入ると、イギリスはルネサンス期を迎え、大陸からラテン語やギリシア語が借入されることとなる。このように英語は度重なる言語接触を繰り返し、借入によって語彙豊かな言語となっている。今現在では英語の本来語は 6 割を占め、残りの 4 割はラテン語、ギリシア語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、その他からの借入語である。日本語から借入された語もあり、それは凡そ 350 以上ある。最近英語になった日本語としては、「おにぎり」、「べんとう」、「やきにく」等があるが、これらよりも前に「こたつ」が英語になっていることが興味深い。

次に文法への影響を見てみよう。「A に B を与える」という場合、以下のように 2 通りの表記が

可能である。

(2) a. give A B (二重目的語構文)

b. give B to A (与格構文)

二重目的語構文は古英語期からあり、与格構文はなかった。フランス語はこれとは逆で、二重目的語構文はないが与格構文がある。英語が与格構文も持つに至ったのは、ノルマン・コンクエストによるフランス語との言語接触が原因である。

二重目的語構文の場合、A と B の間に A has B のような所有の概念が含意される。

(3) a. He taught the students English.

b. He taught English to the students.

上記の a の場合、学生は英語を習得したという含意があるが、b の場合学生が英語を習得したかは不明である。こうした複数の解釈を持てるようになったのも、フランス語との言語接触があったからである。また、donate (寄付する) という動詞を使う場合、意味的には give と同じく次の 2 つが可能であると予測する。

(4) a. \*donate A B (A に B を寄付する)

b. donate B to A

しかし、donate A B は不可である。これは donate はラテン語起源の単語であり、ラテン語では二重目的語構文はとらず、donate B to A のように与格構文で表したため、その影響で donate A B は不可になるのである。また、provide, present 等もラテン語起源の単語であるため二重目的語構文は不可となる。

また、フランス語との言語接触がもたらしたものに語順の変化があげられる。ゲルマン系の言語は基本語順は SVO が多いが、英語は古英語期では日本語と同じく SOV の語順が多く観察されている。しかし、ノルマン・コンクエスト以降フランス語の影響で、フランス語と同じく SVO が基本語順となっている。



現代ゲルマン語とその基本語順

Germanic Languages		Word Order	
Scandinavian	Icelandic	SVO	
	Faroese	SVO	
	Norwegian	SVO	
	Swedish	SVO	
	Danish	SVO	
West Germanic	Frisian	SVO	
	Dutch	SOV	
	West Flemish	SOV	
	Low German	SOV	
	High German	SOV	
	Swiss German	SOV	
	Afrikaans	SOV	
	Yiddish	SVO	
	English	OE	SOV
		ME	SVO
		ModE	SVO

図 5 ゲルマン系言語の基本語順

言語接触のさらなる影響に関しては、英語の屈折の消失を挙げることができる。英語は古英語期は屈折が豊かであり人称、性、数によって屈折の形がほぼ異なっていた。しかし、中英語期に入ると屈折のないノルド語の影響で、英語の屈折の消失に拍車を掛けることになっている。今現在では、屈折としては3人称・単数・現在の-s, -esが残るだけである。

古英語 動詞の屈折

	現在	過去		現在	過去	現在	過去
1人称単数	-e	-de	1人称単数	-(e)	-d(e)	-(e)	-d(e)
2人称単数	-(e)st	-dest	2人称単数	-st	-dost	-(e)	-d(e)
3人称単数	-(e)þ	-de	3人称単数	-th	-d(e)	-th	-d(e)
1人称複数	-að	-dun	1人称複数	-en	-d(en)	-(e)	-d(e)
2人称複数	-að	-don	2人称複数	-en	-d(en)	-(e)	-d(e)
3人称複数	-að	-dan	3人称複数	-en	-d(en)	-(e)	-d(e)

後期中英語 (14-5世紀) 初期近代英語 (16世紀)

	現在	過去	現在	過去
1人称単数	here	herde	hear	heard
2人称単数	herest	hardest	hearst	heardest
3人称単数	hereth	herde	hearoth	heard
1人称複数	here(n)	herde(n)	hear(en)	heard(en)
2人称複数	here(n)	herde(n)	hear(en)	heard(en)
3人称複数	here(n)	herde(n)	hear(en)	heard(en)

図 6 英語の屈折の消失

こうした通時的変遷に関しては、asの意味の拡張が興味深い。語の意味はその核となるものがあり、それが通時的に拡張していき、様々な意味を持つようになる。

意味の拡張

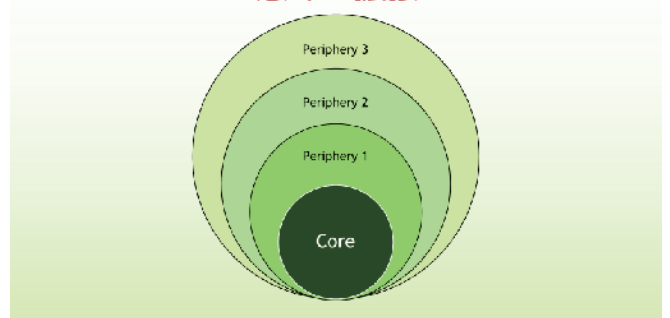


図 7 意味の拡張

英語の as はその典型である。As は元々 all so (すべてそう) であったが、それが縮約されて as になっている。その「すべてそう」が意味の核になり、「すべてそう」であるから「同じ」(as ~ as) という意味が派生し、その後、時の経過とともに拡張して、様々な意味を持つようになっている。

asの用法

all so (すべてそう) が縮約されてasになった  
12世紀に副詞、関係代名詞、接続詞、13世紀より前置詞の用法が確立

- 副詞 **as ~ as** ... 「...と同じくらい」
- 関係代名詞
  - (連例 such, the same, as, so と対応して) ... のような
  - (先行詞の説明) それは...なのだが  
e.g. as is often the case (with ...) (...には) よくあることだが
- 接続詞
 

(**様態**) ... のように、のとおり > (**状態**) ... のとおりで、のままで [に] > (**比例**) ... につれて、に従って > (**限定**) ... するかぎりでは (as far as) > ... したとき [場合、際] > (**時**) ... の時、のとたん、... しながら > (**原因・理由**) ... なので > (**譲歩**) ... だけれども
- 前置詞
  - ~として (の) English as a spoken language
  - ~のように (な) big cities as Tokyo
  - ~の時 (に) as a boy [a girl, a child]

図 8 as の用法と拡張

品詞としては、12世紀に副詞、関係代名詞、接続詞、13世紀より前置詞の用法が確立している。こうした as の用法は英文の中に頻出し、会話や作文においてもよく使用するものである。用法の習得に関しては時間を費やして指導している。

上記のような雑学的知識による発見の促し以外に、自分で主体的に考えて答えを発見する作業も授業に取り入れている。例えば、「そのベッドは柔らかいと思う。」という日本語を英語では3通りの英語で表記できることを示し、その後その3つの

英文を考えてもらっている。結果的には以下のよう  
な3通りの英文が可能であることを提示する。

(5) a. I consider the bed soft.

b. I consider the bed to be soft.

c. I consider (that) the bed is soft.

そして、どうした状況でそれぞれ表記されるの  
か、なぜそうした3つの表記が可能になるのかを、  
グループワーク等での議論を通して発見してもら  
うというアクティビティも行っている(上記の英  
文 a は直接ベッドに触って柔らかいと思うので  
あり、b はそうした直接経験はなくて柔らかいと思  
うのであり、c においては何らかのチラシ等の客  
観的事実、あるいは伝聞によって柔らかいと思う  
場合である)。

### 5.3 結果

以上、発見によるドーパミン分泌の促進となる  
であろう英語の雑学的知識の幾つかを提示した。  
授業においては、こうした知識を適宜提示してド  
ーパミン分泌を促すよう心掛けている。著者が担  
当する英語の授業では、各学期の最初と最後の授  
業の時に、ケンブリッジ大学の英語力測定テスト  
を行い、受講者の英語力の伸びを測定している。  
結果としては、これまで毎学期どのクラスにおい  
ても一定の伸びが観察されている(伸び率はクラ  
スによって異なるが、最小で1.2倍、最大で1.5倍  
となっている)。今回提示したような雑学的知識  
による発見が、成績の伸びにどのくらい繋がって  
いるか検証することが今後の課題であるが、過去の  
授業評価アンケートの結果に「雑学的知識が面白  
い」、「役に立った」、「豆知識がよかった」など  
のコメントが見られることから、受講者の中にはも  
っと探求、学習したいという欲求が生まれ、その  
ことが成績の伸びに繋がっているのではないかと  
思われる。

### 6. おわりに

変化の激しい時代を生きる学生たちには、大学  
卒業後も絶えず学び続けていくことが求められる

と考えられる。その際に、疑問を持ち、探究を欠  
かさない姿勢が備わっていることが重要であろう。

教養力育成科目は、学生に狭い意味での専門性  
以外の視点を与えること、また異なる考え方を持  
った学生同士が教室で集い、意見を述べ合いなが  
ら、自らが今抱えている問題が実は個別のもので  
はなく、少なからぬ人々に関心を共有できる類の  
ものであることに気づかせる機会を提供すること  
にひとつの使命がある。その際にトピックとなる  
事柄が、各授業担当者の専門内の問題と位置づけ  
られる。教員側には、学生が関心を持てるような  
形に教育研究領域をうまく加工しながら問かけ  
るように提示し、学生同士がその問題に異なるア  
プローチをすることを支援する姿勢が求められよ  
う。

本取り組みは、教養力育成センターが自立化す  
ると同時に開始したもので、今年度で3年目であ  
った。教員同士が自らの授業実践を語り、異なる  
専門分野の教員によるフィードバックを得る中  
で成長できる機会を得られたという意味で、意義  
があったと振り返るものである。教員が学び続け  
る中でこそ、学生にも学ぶことについて伝授し得  
ることに思いを馳せ、来年度以降もこの活動を継  
続させていきたい。